



## チュウジシギ *Gallinago megala*

シベリア中部で繁殖し、インド・南アジア・ジャワ・オーストラリア北部で越冬<sup>※1</sup>する。日本は春秋に通過するのみである<sup>※2</sup>。

本種を含むタシギ属の4種、タシギ *Gallinago gallinago*、ハリオシギ *G. stenura*、チュウジシギ *G. megala*、オオジシギ *G. hardwickii*は外見が酷似しており、日本産鳥類のなかでおそらく最も識別が難しいグループといわれている<sup>※3</sup>。

簡単で確実な識別点は尾羽の形状と枚数を数えることだが、野外で確認することは難しい場合が多い。そのため発見しても、確実な識別に至らないことも多々あると考えられる。



▲1999.8.1 観音寺市三豊干拓 Photo©岩田篤志

四国では1983年9月18日（徳島県小松島市田野町）での記録<sup>※4</sup>があり、これがおそらく公表された唯一の写真を伴う記録である。日本野鳥の会愛媛県支部は、本種を愛媛県における「写真、録音または標本が残っているもの」に分類している<sup>※5</sup>が、具体的な記録や写真は掲載していない。

香川県では、過去に鳥獣目録<sup>※6</sup>に掲載されているが、根拠となる記録の詳細は不明である。そのためか、1998年10月までに香川県で観察記録があったとされる種のリスト<sup>※7</sup>には掲載もされていない。

しかし1999年8月1日、観音寺市三豊干拓にて現地にてチュウジシギと識別し、写真撮影に至った記録があり、今回その詳細が正式に公表された<sup>※8</sup>。これは明確な、そして写真を伴う記録としては香川県で初めてのものである。

本種は確実な観察記録がないためか、香川県のレッドデータブック<sup>※9</sup>の対象種になっていないが、分布から少数が通過している可能性は高い。しかし県内の干拓地の減少により、本種の県内での生息環境は悪化している。本種のような旅鳥には、特に採餌・休息の場が必要不可欠であることから、保護対策の基礎資料となる県内での記録（特に三豊干拓地）を今後増やしていくことが重要である。

※1 藤巻裕蔵. 1996. メリケンキアシシギ、・・・チョウジシギ. 樋口広芳・森岡弘之・山岸哲(編)日本動物大百科第3巻 鳥類Ⅰ. 平凡社

※2 日本鳥学会. 2000. 日本鳥類目録(第6版). 日本鳥学会

※3 茂田良光. 2000. 日本産ジシギ類4種の識別. BIRDER 14(5): 38-47.

※4 高知新聞社. 1995. 四国の野鳥. 高知新聞社

※5 日本野鳥の会愛媛県支部. 1992. 愛媛の野鳥観察ハンドブック はばたき. 愛媛新聞社

※6 香川県. 1980. 香川県鳥獣目録. 香川県環境保健部自然保護課

※7 香川県. 1999. 第53回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」記念誌 かがわの野鳥. 香川県

※8 岩田篤志. 2006. 「三豊干拓におけるチュウジシギ *Gallinago megala* の観察記録」香川生物 第33号. 香川生物学会

※9 香川県. 2004. 香川県レッドデータブック 香川県の希少野生生物. 香川県環境森林部環境・水政策課